

飯能市の概要と原市場東地区について

(飯能市史 資料編より抜粋)

飯能市は埼玉県の南西部に位置し、市北西部は山地、南東部は丘陵及び台地を形成山地部は市域の七割を占め入間川(名栗から名栗川)・高麗川の二大河川が西部山地から東部台地に流れています。

原市場東自治会は曲竹(旧曲竹村)と金山・房ヶ谷戸(旧原市場村)の3地区がまとまった自治会です。各地区の特色や由来など紹介し地元(ふるさと)の良いところが沢山あるのではと思いブログに書きました。

但し、専門家ではないので飯能市の資料など参考にしましたので詳細についてはご容赦願います。まずは、各地区の地名について(飯能市史より抜粋)です。

曲竹:地名の由来は下赤工竹際の河原から見上げると、蛇行する川が崖の下を曲がりくねっている様がよくわかる。曲岳(嶽)である。竹際(岳際)がまた字名。山崎の南、村の地名はここから起こる。昔はマガタケ。

房ヶ谷戸:肥沢の南にある川沿いの谷戸。房は西光寺の房(坊)があった。西光寺墓地には原市場地区最古の正元2年(1260)以下の大板碑、4基並んで建つ。

金山:房ヶ谷戸の西、金山は鉱山の別名、また、鍛冶屋の神様、金山彦神のこともである。この地には鍛冶屋さん(鍛冶屋)が居たに違いない。尚、金(ゴールド)とは関係ないようです。

房ヶ谷戸地区には「飯能の指定文化財」がありますので紹介します。旧西光寺後に 阿弥陀三尊種子板碑 四基(市指定文化財、鎌倉時代)

飯能市ホームページURLを加工して作成

西光寺板石塔婆(さいこうじいたいしとうば) (市指定・考古資料)



[2012年10月3日]

原市場の西光寺にある板石塔婆は一群四基からなり、内訳は次のとおりです。(写真向かって右から)

- (1)正和元年(1312)銘、全長187cm(埋め込み部分含む)
阿弥陀三尊種子 沙弥性円による造立
- (2)正和4年(1315)銘、全長195m2cm(埋め込み部分含む)
阿弥陀三尊種子
- (3)正元2年(1260)銘、全長205m7cm(埋め込み部分含む)
阿弥陀三尊種子
- (4)弘長元年(1261)銘、全長255m5cm(埋め込み部分含む)
阿弥陀三尊種子 市内最大

いづれも緑泥片岩が用いられています。(3)、(4)は大きな額と素朴な種子をもつものに対し、ほぼ50年後に造立された(1)、(2)は月輪(がちりん)、蓮座(れんざ)、偈(げ)などに意匠をこらし優雅です。この二基ずつは形態、本尊、銘文、造立年代が近似しています。さらに半世紀たった1360年代に造立の動きは最盛期を迎えるので、これらは初期板石塔婆の指標とされ貴重です。



西光寺板石塔婆



現在は写真の通り保全管理されています

飯能市指定文化財

西光寺板石塔婆4基 原市場(房ヶ谷戸共有地)鎌倉

昭和62年4月1日 願成寺(川寺)の「願成寺板石塔婆」、西光寺(原市場)の「西光寺板石塔婆」が考古資料として、川寺の「大光寺双盤念仏」、落合の「西光寺双盤念仏」が無形民俗文化財として飯能市の文化財に指定される。

板碑(板石塔婆)は年長者に対して冥福を祈る法要のため鎌倉時代にはじめてつくられた供養塔。鎌倉時代後半に全国に普及し、南北朝時代・室町時代に最盛期をむかえ、板碑は「板石塔婆」ともいう。秩父産の緑泥片岩でつくられたものも広い範囲で見られる。

西光寺板石塔婆製作1260年～1360年と鎌倉中期(1224-1266)鎌倉後期(1267-1333)室町時代。



地元にも「飯能の指定文化財」があります、是非ご覧になってください。

